2. 久徴園サブコース

久徴園サブコースは、久徴会館へ上がる石段から始まります。「久徴園入口へ」の案内板の下に、ノカンゾウ、ヤブカンゾウ、ユウスゲなどがあり、右側の体育館側には、ドウダンツツジ、ハマユウ、コンギク、ノコンギク等が植えられています。冬の時期には、スイセンが白い花をつけます。久徴会館の渡り廊下の階段を下って、メタセコイア～東屋～山頂広場～椿園と続くコースです。

左から順に
ナワシログミ /カワラナデシコ /ダイセンミツバツツジ /ヤブラン /ウグイスカグラ /トチノキ /モリアオガエル /ハマナス /秋の紅葉 /マユミ /トキワイカリソウ /冬の久徴園

ノカンゾウ　ヤブカンゾウ　（ススキノキ科　花期／7～8月）

ノカンゾウの花は一重咲きで、ヤブカンゾウは八重咲きです。カンゾウとは、中国原産の漢方薬の「萱草」からきています。7～8月に咲く橙赤色のヤブカンゾウの花は、雄しべが花弁のような形に変化し、八重になったものです。そのため、生殖能力は失われており、株分けでしか増やすことができません。海浜にあるハマカンゾウ、県内では隠岐に稀産するニッコウキスゲ（ゼンテイカ）と共に、花は朝開いて夕方にしぼみます。一方、山地草原に生えるユウスゲ（キスゲ）は名前のとおり、夕方咲いて翌日の午前中にしぼみます。三瓶山の草原に生えています。ノカンゾウやヤブカンゾウは文字として文献に載るよりも前に、鑑賞用あるいは薬用として中国から渡来したもの（史前帰化植物）が広まったものでしょう。ヤブカンゾウの原種となった中国のホンカンゾウ（萱草）は漢方の消炎、利尿薬ですから、ヤブカンゾウも薬効があるかも知れません。生の花をそのままサラダの彩りに使うときれいですし、若い芽を田の畦で摘み、茹でて酢みそで食べた経験のある人は多いことでしょう。カンゾウは万葉集では「わすれぐさ」です。

忘れ草わが紐に付く香具山の故（ふ）りにし里を忘れむがため　（「万葉集」巻3　大伴旅人）
萱草や青田の畦の一ならび　（正岡子規）

ノカンゾウ

ヤブカンゾウ

ユウスゲ　（ススキノキ科　花期／7～8月）

ノカンゾウ、ヤブカンゾウの隣にあるのがユウスゲ（夕菅）です。花色がレモンイエローなのでキスゲともいいます。スゲとは、カヤツリグサ科のスゲに葉が似ていること、ユウは、花が夕方に開き、翌日の午前中に閉じることによります。北海道を除く山地の草原に分布する多年草で、三瓶山の北、西の原草原などで見ることができます。ユウスゲと同じワスレグサ属のニッコウキスゲ(p.48)は、中部以北の草原に群落をつくっています。こちらは朝開いて夕方閉じます。

ユウスゲ

黄菅（きすげ）咲くその蘂（しべ）を見し空を見し　（依田明倫）

ニッコウキスゲ　（ススキノキ科　花期／7～8月）

ニッコウキスゲは「日光黄菅」で、日光や尾瀬に多いことによりますが、中部地方以北の山地、亜高山、海岸などに分布しています。別名を「ゼンテイカ（禅庭花）」といいますがその由来は不明です。ユウスゲと違い、朝開花して夕方には閉じる一日花です。ノカンゾウ、ヤブカンゾウの隣に植えてあります。

ニッコウキスゲ

ハマカンゾウ　（ススキノキ科　花期／7～9月）

ハマカンゾウは「浜萱草」といい、関東以西の暖地の海岸斜面に咲くノカンゾウに似た花で、自生地は島根県では確認されていません。花は橙赤色ですが、暖地の強い日光をうけて赤みの濃い色の花も見られるということです。葉も冬に枯れないで残ります。他のカンゾウ類よりやや遅く咲きますので比較して見てください。一日花。

道しらば摘みにもゆかむ住の江の岸に生ふてふ恋忘れ草（ハマカンゾウ）（古今集墨滅（すみけち）歌）

ハマカンゾウ

ハマユウ　（ヒガンバナ科　花期／8～9月）

体育館前の斜面にあります。ハマユウは「浜木綿」と書き、白い鱗茎を木綿（ゆう）に見立てたものです。木綿（ゆう）とは、コウゾの樹皮から作られる糸で、榊（さかき）につける幣（ぬさ）に用いられます（白い花が木綿に似ているからとの説もあります。）葉がオモトに似ているので「浜万年青（はまおもと）」の別名もあります。ハマユウは、関東以西の太平洋海岸の砂地に自生する常緑の多年草です。日本海側では、あまり見られません。花は、ヒガンバナを白く大きくしたような花で、細い花弁が反り返り、雄しべ（6個）が突きだします。夕方から咲き始め、夜中に開花。強い芳香があります。種子は海流にのって運ばれます。花弁がテッポウユリのように筒状になったハマユウが庭に植えられていますが、これはインドハマユウ（8～9月）やクリナムの仲間で外来種です。

ハマユウの花

インドハマユウ

み熊野の浦の浜木綿百重なす心は念（おも）へど直（ただ）に逢はぬかも
（「万葉集」巻4-496　柿本人麻呂）

ノジギク類　（キク科　花期/4～5月　結実期/10～11月）

瀬戸内海や四国、九州東部の海岸部では白花のノジギクが見られます。同じ白花であるリュウノウギクとの違いは、葉身の基部が膨らんで5裂し、総苞片[a]がやや幅広く、外片がリュウノウギクほど長くないのが特徴です。丁字毛[b]も多くはありませんが、葉全体に見られます。また、葉の薄い瀬戸内海沿岸のものをセトノジギクとして扱うことがあります。他にも、熊本県や鹿児島県などの九州西岸に生え、丁字毛が非常に多くて白っぽく見えるサツマノギクもあります。さらに、高知県の足摺岬（あしずり）から愛媛県の佐多岬、一部大分県にかけて、葉に丁字毛が多く3裂するのがアシズリノジギクです。園内ではこれらすべて植栽されています。白花のキクをこれらの特徴をもとにその違いを確認してみてください。

ノジギク

a　総苞片 / 花の下部で花を保護する包葉。
b　丁字毛 / ルーペで拡大すると、先がT の字状に見える毛

リュウノウギク　（キク科　花期/7～8月）

福島、新潟以西に分布し、県内でも内陸部の崖地などに点在して広く見られます。黄色の花を咲かせるシマカンギク類は葉身の下部に膨らみがありますが、リュウノウギクはくさび型で膨らんでいません。また葉の切れ込みも少ないです。花は白花で総苞片が細く、特に外片が非常に長く内片と先がそろうのが特徴です。野菊と聞いて想像するのは何色ですか。島根半島では野菊といえばこのリュウノウギクの白花となります。茎や葉を揉むと中国から伝わった竜脳の香りがするというので「竜脳菊（りゅうのうぎく）」といいます。

リュウノウギク

サワヒヨドリ　（キク科　花期/8～10月）

山野の日当たりの良い湿地に生える80㎝以下のキク科の多年草です。山地の乾いたところに生えるヒヨドリバナに近縁の一種で、サワヒヨドリは花が淡紫色から白色で、上部に頭花を沢山つけます。三瓶山の西の原の草原では、9～10月にかけて花が見られます。同じくヒヨドリバナの仲間で秋の七草の一つフジバカマ(p.93)は島根県下には自生はなく、庭や公園で栽培されています。

サワヒヨドリ

ススキ　（イネ科　花期／8～10月）

ススキ「芒」は秋の七草の一種の尾花で、中秋の名月にお団子とともに生けて観月の宴を催します。イネ科で、ススキ草原を作ります。刈り取って乾燥させ茅葺き屋根の材料として使い、飼料や堆肥にもなります。万葉集では、「尾花」です。

ススキ

狐火の　燃えつくばかり　枯尾花（与謝蕪村）
山は暮れて　野は黄昏の　芒（け）かな（与謝蕪村）
我が宿の尾花が上の白露を消たずて玉に貫くものにもが　（「万葉集」巻8-1572　大伴家持）

ドウダンツツジ　（ツツジ科　花期／6～7月）

ドウダンツツジのドウダンとは灯台（ドウダン）という意味です。もっとも海を照らす灯台ではなく、この木の枝が三分枝状になる様を結び灯台の脚（右図）に見立てたものということです。ドウダンツツジは紀伊半島以西の山地に産し、花は白色壷型です。同属のサラサドウダンは北海道西部～四国の冷温帯・亜高山帯に自生し、標高の高い尾根や岩場で見られます。ただし、庭木として植えられています。サラサ（更紗）とは染め模様の名前のことです。花冠は釣鐘状で淡紅白色で紅色の縦状の模様があります。株によって色合いの違うのものがあり、真っ白のものさえあります。花が赤色で、関東以西の山地の岩尾根に自生するベニドウダンもあります。

ドウダンツツジ

どうだんの白鈴の花日を振りて　（猿山木魂）

イイギリ　（ヤナギ科　花期／4～5月　結実期／10～11月）

イイギリは高さ10～15m、直径40～50㎝の大木になる落葉樹です。4～5月ころ淡緑色の房状の花を咲かせます。秋には、1㎝ばかりの丸い赤い実がブドウの房のように垂れ下がります。いずれも高い木のてっぺんに着きますので、見上げないと見えないですが、葉が落ちても果実は翌年まで残るので美しく鑑賞できます。葉が桐の葉に似て、昔この葉で飯を包んだので「飯桐（イイギリ）」といいます。

イイギリの実

久徴会館へ続く石段の途中にもサンショウバラやナワシログミ、アカメガシワ、ハナミズキ、アキグミ、ワレモコウ、キソケイ・・・といった様々な植物が植わっています。ゆっくり見ながら階段を上ってみましょう。

サンショウバラ　（バラ科　花期/6月　結実期/8月～）

サンショウバラ（山椒薔薇）は、葉や刺がサンショウに似ていることによります。ただし、サンショウのような香りはありません。全体に刺が多く蕾の時から刺だらけです。箱根地方特産でハコネバラの別名もあります。美しい花のバラですが、実には針状の鋭い刺が無数にあり先端に萼の名残が残っています。この木は古くから久徴園にあり、柳楽 茂 氏が園丁をしていた昭和30年代に植えられたものでしょう。

サンショウバラ

ナワシログミ　（グミ科　花期/10～11月　結実期/5～6月）

海岸部に自生することの多いグミの仲間です。グミ「茱萸」の謂われは、刺を意味するグイと実のミが一緒になった方言のグイミが訛ってグミになったという説があります。ナワシログミは、この実が丁度苗代を作る頃に熟すので「苗代茱萸」といいます。お菓子のグミは、ドイツ語のガムを意味する"Gummi"から来ており植物のグミとは無関係です。ナワシログミの実は赤く熟して美味しく食べられ、昔はお菓子の代わりをしました。若い実を食べるとえぐいのでペッペとはき出したものです。

ナワシログミ

アカメガシワ　（トウダイグサ科　花期/6～7月　結実期/9～10月）

成長すると15mにもなる大木ですが、普通は伐採跡地や崩壊地などに生える5m程の落葉樹です。成葉は緑色ですが、新芽の4～5枚が赤く、カシワの代用として食物を盛る器として使ったのでアカメガシワ「赤芽柏（槲）」といいます。あまり存在感のない黄白色で花弁のない花とはじけると小さな黒い種子を出す果実を付けます。材木はヒラタケ栽培の原木として使われます。

アカメガシワの花

ハナミズキ　（ミズキ科　花期／4～5月　結実期／10～11月）

別名アメリカヤマボウシといい、アメリカ東海岸からメキシコにかけて分布しています。明治半ばに渡来したもので、1912年、当時の東京市長・尾崎行雄がワシントン市にサクラを送り、その返礼として東京に贈られたことで有名です。本校には前出雲市長・岩國哲人氏から贈られたものがあります。4枚の花弁のように見えるのは、花弁ではなくて苞（ほう）と呼ばれます。花を包む葉が変化したもので、在来のヤマボウシと異なり、先端が丸くくぼんでいます。花は中心の丸い固まりの部分でよく見ると小さい花が無数にあります。日本のヤマボウシ（6～7月、9～10月）の実は食べると甘酸っぱくて美味しいのですが、ハナミズキの実は食べられません。

ハナミズキ

花みづき紅白風も二た岐れ　（塙　毅比古）

コノテガシワ　（ヒノキ科　花期／3～4月　結実期／10～11月）

コノテガシワは中国原産の樹木で、和名のコノテガシワは「児の手柏」つまり、広がった葉が子供の手のひらのようであるとの意味からです。確かに葉は平べったく手を広げたように直立気味に広がっており、表裏が同じようで区別がつきません。コノテガシワの園芸種の千手（センジュ）は、庭や公園によく植えられています。花は3月頃から開き、雌花は白緑色で種鱗の先端は反り返ります。球果は1～2.5cmで、独特の形をしており、白緑色からやがて褐色になります。

コノテガシワ

アキグミ　（グミ科　花期／4～6月　結実期／9～11月）

山野の日当たりの良い川辺などに生え、高さ3m以下の落葉低木です。晩春に筒状の小さな花を沢山下垂させ、初め白色後に黄色になります。秋、直径6～8㎜の丸く赤い実がなり食べられます。グミの仲間は、春から夏に熟すものが多いのですが、これは秋に熟す「秋茱萸（あきぐみ）」です。食用にする大形（長さ1.5～2.5cm）のグミは、トウグミやダイオウグミ（ビックリグミ）です。昔は各家庭に植えてあり、お菓子代わりに食べたものです。

アキグミ

キソケイ　（モクセイ科　花期／5～7月）

ヒマラヤ原産の常緑低木で観賞用に栽培され、「黄素馨」と書きます。枝は緑色で稜線があり無毛。葉は互生し、羽状複葉で３～７枚の小葉をつけます。花は５～７月頃、枝の先に散房状の花序をつくって８～20個つき、鮮やかな黄色で花冠があり、芳香があります。よく似たものにソケイ（素馨）というインド原産の常緑低木があります。複葉は対生、葉に丸味が少ない、樹木全体が軟弱である等の点で区別されます。この仲間はJasminum属といい、香水のジャスミン(Jasmin)の原料として栽培され、生花や茶花の好材料としても利用されます。

キソケイ

ワレモコウ　（バラ科　花期／8～10月）

バラ科の一種ですが、バラの花のように派手さはなく、花弁が５枚の倍数からなるバラ類と異なります。ワレモコウ属は、花弁はなく４枚の萼片が先端に集まって花の穂を作ります。１～2㎝の楕円形をした暗赤紫色の花序は上から下へと咲き下ります。ワレモコウの謂われは、インド原産の木香に花が似ているから「吾木香」、あるいは、私も亦紅色から「吾亦紅」など諸説ありますが定説はありません。先端に沢山の赤い玉を付けた姿が愛らしく生け花によく利用されます。

ワレモコウ

吾亦紅さし出て花のつもり哉　（小林一茶）　　**吾も亦紅なりとひそやかに　（高浜虚子）**
吾亦紅すすきかるかや秋くさのさびしききはみ君におくらむ　（若山牧水）

ゴンズイ　（ミツバウツギ科　花期／5～6月　結実期／9～11月）

この樹の材はもろくて役に立たないので、役に立たない魚のゴンズイと同じ名前が付けられたといいます。「権萃」は当て字です。葉は２～４対の小葉の先端にもう１枚の小葉がつき、合計５～９枚の小葉からなる１枚の葉（奇数羽状複葉）を対生してつけます。花は淡黄緑色の目立たない花ですが、秋に実る果実は、果皮が赤く綺麗で、熟すと中から黒い実が飛び出してよく目に付きます。春先に枝を切ると樹液があふれ出るので四国、九州でショウベンノキと呼ぶ地方があります。もっとも、ショウベンノキという樹は別種で亜熱帯地方に生えるものです。

ゴンズイ

ゴンズイの吼ゆるが如く息継げり　（高澤良一）

思斉寮から久徴会館へ

昭和 13 年 (1938 年)、思斉寮が新築落成されました。思斉寮は生徒の礼儀作法、お茶の修行、諸会議の場、卒業生の宿泊等に供するため、久徴会が醵金して建てられました。玄関を入ると洋風の部屋があり、右に和室、左に茶道の練習場がありました。玄関前にはフジ棚があり、和風庭園には秋の七草園が整然と配されていました。平成 6 年 (1994 年) に思斉寮は解体され、モダンな久徴会館に生まれ変わりました。玄関前にはハナミズキやソメイヨシノ、モミ、ケヤキなどが植えられています。階段の途中には、久徴会館建設の際に植えられたキソケイやコノテガシワがあります。また、ここにはかつて思斉寮入口にあった大町桂月の句碑が建っています。　「雲州の梅に別るゝ寒さ哉　　桂月」

現在の久徴会館

思斉寮入口付近/ 昭和26 年(1951 年) 頃

大町桂月句碑/ 昭和37 年(1962 年) 建立

大町桂月氏より平田先生に宛てた手紙

・大町（おおまち）　桂月（けいげつ）(1869~1925)

近代日本の歌人、詩人、随筆家、評論家。
本名＝大町芳衛 (おおまちよしえ)。大町桂月は、明治 32~33 年にかけて本校の前身である簸川中学校で教鞭をとった。教職を辞し、上京後もしばしば出雲を訪れ、大正 9 年に来訪した際には、平田駒太郎先生の案内で立久恵峡を訪れた。桂月は平田先生の学識と人柄に敬服し、出雲の地を出身地の土佐、そして東京に次ぐ「第三の故郷」として親しんだ。

ハマナス　（バラ科　花期／6～8月　結実期／7～9月）

ハマナス

ハマナスをハマナシともいいますが、これは海岸にあって果実を食べるので「浜梨」の意味で、東北人の訛がそのまま伝わったといいます。ハマナスは樺太から北海道と南下し、大平洋側では茨城県まで、日本側では北陸から鳥取や島根に及び、昔は浜田市久代まであったといわれています。今では、浜田市では見当らず、大田市静間と湖陵町差海川の砂浜にあるものが、日本海側（内帯）の西限となっています。（共に天然記念物として、県の指定を受けています。）その他には、平田市河下町と隠岐島にも知られています。全体に棘が多いですが、花が美しくあちこちの庭園に植えられています。北海道の原生花園を彩る花です。

ハマナデシコ　（ナデシコ科　花期／7～8月）

ハマナデシコ

大和なでしこ、ナデシコ・ジャパンで有名なナデシコ科で、海岸の砂地、岩上や崖地などに生える多年生草本です。別名をフジナデシコともいいます。夏７～８月ごろ、紅紫色の花を先端にたくさん咲かせます。島根県の海岸にもかつてはたくさんありましたが、砂浜が減少し、崖地が崩壊すると共に減少傾向となり、今では希少価値となっています。盗掘もその原因となっています。絶滅危惧種Ⅱ類の植物として保護されています。斐伊川の土手や山地の草原には、カワラナデシコが生えています。こちらは、秋の七草の一つです。

モッコク　（モッコク科　花期／6～7月　結実期／10～11月）

モッコク

本来は、暖帯の海岸付近に自生する常緑の高木ですが、樹形が半円形に整うので庭木としてよく植えられています。常緑の葉は光沢があり若葉が赤みを帯び葉先に集まってつき鑑賞価値の高い庭木です。雄木と両性花の株があり、後者には秋に1.5㎝ほどの実が下垂し熟すと赤い種子が顔を出します。当然ながら雄木には実がなりません。

木斛のひそかな花に寄りて立つ（尾形初江）

平成19年に、久徴会館から1号館への渡り廊下が新設されました。以前の久徴園整備事業で元々ある石段の上に屋根が付けられました。久徴会館玄関前にはケヤキとモミがあります。さらに、石段の左右には、モチツツジやクルメツツジ、シロバナモチツツジ、ワカサギツツジ(エノキの下)、エノキ、マメガキ(シナノガキ)、セイヨウヒイラギ、ワビスケ等があります。

オッタチカンギク　（キク科　花期/10～11月）

オッタチカンギク

立久恵峡を中心とした地域のみに知られています。4倍体　2n＝36でシマカンギクに近いものですが、総苞[a]が細く特に外片が棒状になることを特徴とします。また、葉の切れ込みが浅く3～5中裂します。現地で見ると、葉の毛の量が非常に多いので白っぽく見えます。また花の色も他の黄色のキクよりやや薄く思われます。 産地の乙立（おったち）と通常のシマカンギクより茎が短いので倒れにくい（おっ立つ）と合わせた命名となっているようです。これも県内の植物を研究された丸山巌氏を称えて　*Chrysanthemum indicum* L. var. *maruyamanum* Kitamura とされています。

a 総苞 / キク科に見られる花の集合体を頭花といい、その周囲にある萼のように見える部分を総苞という。その下部にあり外側を包んでいるものを外片、上部で内側にあるものを内片という。

サンインギク　（キク科　花期/10～12月）

サンインギク

京都大学の北村四郎博士により大田市三瓶町池田を基準産地[a]として記載されたものです。従来このキクとされるものは山口県を北上し、出雲市多伎町を北限として海岸部からやや内陸部に生育しています。基準産地の池田は最も内陸部の産地になります。染色体数が6倍体　2n＝54の黄ギクで、品種改良された園芸種を総称するイエギクが6倍体であるため県内でも民家の近くでは白花や舌状花[b]の花冠が短いものなど各地で雑種を作っています。このため現在サンインギクはイエギクとの交雑種の名前となり、交雑していないものはシマカンギクの扱いとなっています。サンインギクが雑種名として使われるようになっていることは島根県が基準産地であるだけに残念に思われます。

a 基準産地 / 新種の記載の基となる標本(基準標本)が採集された場所

b 舌状花 / キク科で1つの花に見えるのは花の集合体で長い花びら(花冠)のあるものを舌状花、ないものを筒状花という。

オキノアブラギク　（キク科　花期／10～11月）

4倍体　2n＝36で、隠岐の海岸部全域に生えています。これも北村四郎博士によって記載され、内陸部のシマカンギクに対し、頭花が小さく、花序が散形状（1箇所から分かれて出ているように見える）になることを特徴とします。さらに、海岸部に生えることもあり、葉が厚く葉裏の毛が多い、裂片の先があまりとがらない、舌状花の花冠が長くないという特徴もあります。現在は名前が消え、シマカンギクの扱いとなっています。松江市野井町では隠岐由来のものとされるものが海岸部にまとまって生育しています。

オキノアブラギク

ケヤキ　（ニレ科　花期／4～5月　結実期／10月）

ケヤキの材は木目が美しく、狂いがほとんどなく、湿気に耐え、保存性が高いので利用範囲は大変広く伐採されることが多く、そのため、日本中にあまり大きな樹は残っていないのではないかと心配されます。でも、日本を代表する落葉樹なので、あちこちに巨樹、巨木があり、天然記念物に指定されています。街路樹、公園にもよく植えられています。島根大学医学部の道路の街路樹はケヤキで、秋の紅葉が見事です。

ケヤキ

ノシラン　（キジカクシ科　花期／7～9月　結実期／10月～）

久徴園の至る所にあります。県西部の海岸近くの林の中に自生するものです。花茎の先端が扁平になって熨斗鮑（のしあわび）のように見え、花は蘭に似ているので「熨斗蘭」と名付けました。コバルト色の果実をつけます。この仲間のジャノヒゲ（蛇の髭）は別名リュウノヒゲ（龍の髭）ともいい、この葉が幅2～3㎜と髭のように細長いので、蛇（龍）の髭に例えたものです。葉の間に総状花序を出し、淡紫色～白色花を下向きにつけ、秋から冬にコバルト色の種子を葉の中に隠れるようにつけます。2～3号館中庭にあるグランドカバーのタマリュウはジャノヒゲの矮性（わいせい）品種です。

ノシラン

モチツツジ　（ツツジ科　花期／4～6月）

高さ1m位に丸く刈り込んで庭木などとして栽培される半常緑の低木です。若枝や花がねばねばして鳥黐（とりもち）のようだというので「黐躑躅（もちつつじ）」といいます。春、直径5～6cmの漏斗形で深く5つに切れ込んだ淡紅紫色の美しい花を全面に無数に咲かせます。1つの花を見ると、最上部の裂片には深紅色の斑点があります。中心に上に曲がった雄しべ5本（～10本）と雌しべ1本があります。モチツツジから沢山の品種が作出されています。

モチツツジ

眦（まなじり）につつじの色のかたまれる　（上野　泰）

エノキ　（アサ科　花期／4～5月　結実期／9月～）

漢字では「榎」を当てます。恐らく夏、木陰が好まれるのでこの字にしたのではないかと牧野富太郎もいっています。器具の柄に利用したので「柄の木」、よく燃えるので「燃え木」が転じてエノキになった等の諸説あります。漢名では「朴樹」と書きます。ケヤキに近い植物です。久徴園の中にもたくさんあり、松江市の城山公園には大木があります。巨樹・巨木（幹直径1m以上）になるので、遠方からでもよく見えるので松の木とともに一里塚や村境に植えられたり、神社の神木とされたり、公園や庭木としても植えられています。いろいろな虫が寄生しやすくて葉は穴だらけになりますが、この葉を食草にして国蝶のオオムラサキやゴマダラチョウなど多くの昆虫がこの樹から生まれます。秋に熟す実は、動物、鳥たちの好物です。

エノキ

わが門の榎の実もり食む百千鳥千鳥は来れど君ぞ来まさぬ　（「万葉集」巻16-3872 作者未詳）

シナノガキ　（カキノキ科　花期／6月　結実期／9～11月）

古く中国より渡来し、栽培されています。果実は丸く、直径1.5cm位の小さな実をたくさんつけ、マメガキとも呼ばれます。秋に黄色に熟し、霜に逢うと黒紫色になり甘くて食べられます。

また、未熟の果実から柿渋をとり、塗料や染料に利用され、材は堅く黒みを帯びるのでクロガキといって茶托や盆などの工芸品、建築材料として好まれます。

シナノガキ

セイヨウヒイラギ　（モチノキ科　花期／5～6月　結実期／9～12月）

ヨーロッパ中南部、アジア西部原産。モクセイ科のヒイラギと鋸歯（葉の縁のギザギザ、刺）が似ているということでヒイラギの仲間と勘違いし、西洋産のヒイラギとしてしまったようです。実際はモチノキの仲間で、葉は互生し（ヒイラギやヒイラギモクセイは対生）、冬に赤い実がなります。クリスマスケーキなどについている飾りホーリー（Holly）がこれです。同じ仲間に、北アメリカ原産のアメリカヒイラギや中国原産のヒイラギモチもあります。

セイヨウヒイラギ

テイカカズラ　（キョウチクトウ科　花期／5～6月　結実期／10～11月）

久徴会館の石段に、地面を覆うように生えているツル植物です。普通は、岩や木にからみついて登り、5弁で船のスクリュー状にひねった白い花が咲きます。果実は10～20㎝の赤い紐状になります。これが乾燥して出てくる種子は3㎝程度の白い髭が毛鑓（けやり）のようについています。テイカカズラは若木の時の葉と老木の葉では全く別種のような形をしています。写真の葉は老木で葉もずっと大きく明るい緑色ですが、若木の時は、小さくて丸く、色も黒っぽい感じです。テイカカズラは万葉集では「つぬ」です。

つぬさはふ石村の山に白妙の懸かれる雲は吾王かも
（「万葉集」巻13-3325）

テイカカズラ

コラム

～テイカカズラと悲恋～

後白河天皇の第3皇女・式子内親王（しきしないしんのう）は、美人で素養もあり和歌も上手だった。その式子内親王を「新古今和歌集」の撰者として有名な歌人・藤原定家が恋慕れ、二人は人目を忍ぶ仲となった。密かに恋し合い、和歌のやりとりをして、一緒になりたいと願っていた。しかし、身分の違いでそれはできず、やがて病弱の式子内親王は若くして世を去ってしまう。定家は式子内親王を忘れられず79歳まで独身を通し生涯を終えた。死後、式子内親王を忘れきれない定家の執心は、蔦葛となって式子内親王の墓石に這い、通りすがりの僧による成仏を説く法華経の弔（とむら）いによって、まとわりついた蔦葛は緩み、定家の霊は解けた。この蔦葛を後に「テイカカズラ」と人は呼ぶようになった。（世阿弥作　能・定家から脚色）

渡り廊下を降り、久徴園入口には、クロバナロウバイ、マルバウツギ、ワビスケ、ナツズイセン、サルトリイバラなどが植わっています。

クロバナロウバイ　（ロウバイ科　花期／5～6月　結実期／9～10月）

渡り廊下の入口あたりにある低い樹木です。地際から沢山の枝を出す株立ちとなります。北米原産の落葉する低木で、アメリカロウバイともいい、明治中期に渡来しました。高さは1～2mくらいになります。花はロウバイ（1～2月、p.102参照）よりずっと遅く、5～6月頃に葉が開くのと同時に咲きます。クロバナといっても真っ黒ではなく、暗赤紫色で、細長い花弁が手のひらを合わせたように内向きに重なって咲きます。地際の枝を取り木すれば容易に増やすことができます。

クロバナロウバイ

マルバウツギ　（アジサイ科　花期／5～6月　結実期／10～11月）

久徴園入口（屋根下）の一番手前にあります。

名前の通り葉が楕円形～卵形のウツギ類で、島根県でも普通に見られる細長い葉のウツギ（p.68参照）とは異なっています。葉の表の葉脈はへこみ、葉をさわるとザラザラします。5～6月頃、葉先に白い花の穂をつけます。ウツギはどちらかというと花弁が半開なのに対して、マルバウツギはウメの花のように全開し、中心にある黄色の花盤がよく見えます。主に太平洋側に分布しています。ウツギは「空木」と書き、茎を切ってみると中空になっていることによります。

マルバウツギ

ワビスケ（ツバキ科）▶P.41

ナツズイセン（ヒガンバナ科）

サルトリイバラ（サルトリイバラ科）

メタセコイア　（ヒノキ科　花期／2～3月　結実期／10月）

メタセコイアは化石として見られ、絶滅したものと思われていました。ところが、1946 年、中国の揚子江の支流で生きたメタセコイアが発見され、「生きた化石」として世界中で話題となりました。アメリカに自生して世界一高木となるセコイアによく似ているが変わっているというので、メタセコイア（変わったセコイア）と呼ばれるようになりました。高さが 20m にもなり円錐形の樹形が美しいので、アケボノスギの別名もあります。発見から 3 年後に、日本でも全国に植えられ、その 1 本がここのメタセコイアでしょう。春の新緑はなかなか良いものです。

下から見たメタセコイア

メタセコイアの紅葉

近くに行って落ち葉を拾ってみましょう。鳥の羽根に似た小葉の付き方が少し違います。

A= 小葉が向き合って（対生）ついている、B= 互い違い（互生）についている。どちらがメタセコイアでしょうか。一方は、裸子植物園にあるラクウショウ（ヌマスギ）です。答えはp.63 にあります。

このように、何気なく見ている植物もよくよく観察すると、その植物だけが持つ特徴があり、近縁種との区別点となっています。メタセコイアは、公園や学校、民家などにも植えられていて、朝山小学校、神西小学校、四絡小学校、西野小学校などの学校で大木になっています。

メタセコイアの下にクリハランが茂り、ミヤマヨメナが点々とあります。渡り廊下の横や久徴会館側(スギの下)には、オウレン、ニリンソウ、イチリンソウ、イカリソウ、カラタチバナ(ササコウジ)、ウバユリ、キバナアキギリ、スミレ類などたくさんの草本類が植えられています。このあたりは、久徴園から降りてくる雨水が豊富なのでしょう。ぜひ足を止めてゆっくりと探してみてください。

オウレン　(キンポウゲ科　花期/3～4月)

オウレン

オウレンは、キクバオウレンともいい、一枚の葉は、3枚に分かれ更に細かく切り込んで菊の葉を思わせます。山地樹林下に生え、早春に白い花が終わると花柄は急激に伸びます。その先に袋果が矢車のように輪状につきます。漢名の「黄蓮」からきたもので黄色い根が連なって伸びるので付いた名前です。中国では、シナオウレンやトウオウレンと呼ばれています。貝原益軒は「大和本草」の中で「日本の黄連、性良し、故に中華、朝鮮にもこれを多く渡ります。中華の書に日本産黄連を良しとす。」と述べています。昔から、健胃薬として重要な薬草の一つでした。落ち葉の多い少し湿った林床に多く、漢方のブームでこのあたりの山間部でも栽培されているはずです。葉がセリの葉のように細かく切れ込むもの(2回3出複葉といいます)をセリバオウレンといいます。オウレンの仲間には、他にミツバオウレン、バイカオウレンというのもあります。

ニリンソウ / イチリンソウ　(キンポウゲ科　花期/4～5月)

ニリンソウ

川中美幸が歌う「二輪草」は、ニリンソウで、県内にも稀に生えています。花は2輪とは限らず1～3輪咲きます。山野のやや湿ったところに群生し、三輪生する茎葉には柄がありません。白く5枚の花弁状に見えるのは、本当は萼片で花弁はありません。同じ仲間のイチリンソウ「一輪草」は、各地の山麓の草地、林内に生え、茎葉には長い柄があり、細かく切れ込んだ葉(2回羽状複葉といいます)があることで区別します。また、同じくサンリンソウ「三輪草」は、比較的高い山地に生え、茎葉には短い柄があり、花は2～3個咲きます。これら3種はいずれも元来北方系の植物で、氷河期を経て次第に暖かくなって来て南下し、九州の山地まで達しています。中でもサンリンソウが一番寒さに強く高地に分布し、イチリンソウは寒がり屋さんで暖かいところまで降りてきているという訳です。ニリンソウとイチリンソウは、渡り廊下を降りた久徴会館側に植えてありますので、丹念に探してみて下さい。花は毎年咲くというわけではありません。

イカリソウ類　（メギ科　花期／4～5月）

イカリソウ類

花の形が錨に以ているというのでこう呼びます。葉の分かれ方が３本出たり、２本出たり、さまざまなタイプがあることが知られています。また、海岸部の花は白っぽく、山間部にいくほど色が濃くなるという傾向もあります。山陰から北陸にかけての林下には冬でも常緑のトキワイカリソウ（常盤錨草）があります。李時珍の「本草綱目」に強壮剤として載っていますが、実際日本の学者が研究したところ、これからイカリカンという物質を取り出し、これを動物実験したところ明らかに雄動物の精液が増量することが証明されたというのです。　**燃えのこる焚火の跡や碇草　（義干）**

コラム

～変な名前の植物～

キランソウ

植物にも変わった名前がある。ヘクソカズラ（アカネ科）は、塀や他の植物に絡みつく蔓植物だが、茎や葉を揉むと悪臭がし、屁糞蔓（へくそかずら）という可哀想な名前をもらってしまった。しかし、花は可愛くサオトメバナとかヤイトバナという別名もあるが定着していない。オオイヌノフグリ（オオバコ科）という可憐な青い花を咲かす道端の雑草は、大犬の陰嚢（ふぐり）といういやな名前をつけられてしまった。この草の果実が犬の精巣の袋（陰嚢）に似ているからというのだが、さほど似ているとも思えない。ママコノシリヌグイ（タデ科）は、茎や葉に刺があって触ると痛いが、昔、継子（ままこ）いじめにこの葉で尻を拭ったことによるという。真偽の程は不明。キランソウ（シソ科、左写真）は、山や草原に生えて根生葉が地面に張り付いて広がり地獄の釜に蓋をしているようだというのでジゴクノカマノフタ（地獄の釜の蓋）の別名がある。あらゆる病の薬草なので、「これで病を治し地獄の釜に蓋をする」という意味もあるらしい。松江の城山にあるナンジャモンジャノキは、最初、植物学者でさえ何者か分からなかったのでこう叫んだというのが始まりらしい。正式名はヒトツバタゴ（モクセイ科）。また、城山にはバクチノキ（バラ科）という樹もある。樹皮が剥がれ黄色い膚が露出する事を博打（ばくち）で身ぐるみ剥がされた姿に例えたというが、植物学者も意地悪く変な名前をつけるものだ。

答え　A. メタセコイア　B. ラクウショウ

カラタチバナ　（サクラソウ科　花期／7月　結実期／10月）

サクラソウ科ヤブコウジ属の常緑の30cmばかりの小低木で、山野の林床に生え、ササの葉に似ているというので、ササコウジの名もあります。センリョウ科のセンリョウ（千両）、マンリョウ（万両）に対して、百両ともいわれ、縁起を担いで庭や盆栽として植えられます。秋から翌年春にかけて赤い実が4～5個長い柄の先に葉の下で隠れるようにつき趣があります。江戸時代から武家や園芸家にも好まれ、沢山の園芸品種が作出されています。白実や黄実もあります。

カラタチバナ

ウバユリ　（ユリ科　花期／7～8月）

上品な白い花が咲きます。しかし、花の頃には葉は枯れてほとんどありません。ウバユリの名前の由来にはこんな話があります。世話をする女の子が年頃になって人生の花、つまり結婚する頃には、姥（うば）はもう歯（葉）がなくなっていることに例えたものです。春先、葉がまだ15㎝程度の頃に、球根を掘り出して茶わん蒸しに入れます。百合根そのものであって美味しく食べられます。それ以降のウバユリを掘り出しても、成長に栄養を使われた球根は中身がありません。花後できる丸い果実の中には無数の翼を持った種子が入っており、カラカラになって果実が割れると先端から種子が風に舞って飛び散ります。

ウバユリ

詩仙堂あかりのごとく百合咲けり　（原コウ子）

ミヤマカタバミ　（カタバミ科　花期／3～4月）

山地の木陰に生えます。残雪の頃の登山の疲れを癒してくれる花の一つです。雪解けの頃、山のふもとでは既に咲いていても、頂上近くではまだ堅い蕾であったりすると、山の高さを感じさせてくれる花でもあります。また、花の時期が終わっても、花冠の開かない花（閉鎖花）をつけ、自家受粉により繁殖する術を持ちます。（スミレやセンボンヤリも閉鎖花をつけ、自家受粉を行う。）他にも、日が陰ったり、夜になるとハート型の3枚の葉をたたんで眠るといった特徴があります。（就眠運動）

ミヤマカタバミ

「春浅き林をゆけば　白花のみやまかたばみ　むれ咲きにほふ」　昭和天皇

（昭和46年4月、三瓶山で行われた全国植樹祭で昭和天皇が「三瓶山の麓にて」と題して詠まれた歌です。）

現在のロックガーデン周辺

ミヤコアオイ　（ウマノスズクサ科　花期／4月）

カンアオイ類は、静岡から三重のスズカカンアオイ、高野山一帯のコウヤカンアオイ、伊勢湾から紀伊半島のアツミカンアオイ、四国のナンカイアオイ、九州のツクシカンアオイなどの形態の変化したものがたくさんありますが、島根県全体にあるのがこのミヤコアオイです。また益田市高津町から津和野、山陽にかけてはタイリンアオイ、浜田から山陽にはサンヨウアオイがあります。カンアオイの仲間は、スプリングエフェメラル「春の女神」のギフチョウの食草になります。

タイリンアオイ　（ウマノスズクサ科　花期／4～5月）

益田市高津町から津和野町、山陽地方に掛けて見られる大形のカンアオイです。葉の大きさは 8 ～ 12㎝、筒型で先が 3 枚に割れた花も 3 ～ 4㎝と大きく、花弁はありません。カンアオイの仲間は、花が葉柄の付け根の地際に咲き、種によってそれぞれ特徴があります。

ヒメカンアオイ　（ウマノスズクサ科　花期／11～3月）

ヒメカンアオイは、東北地方から近畿地方と四国に分布する小型のカンアオイです。葉は 5 ～ 8㎝、花は長さ約 8㎜です。島根県には自生していませんが、隣接して植えてあるミヤコアオイやタイリンアオイと比較してよく見てください。葉や花に違いが見られるはずです。

ミヤコアオイ

タイリンアオイ

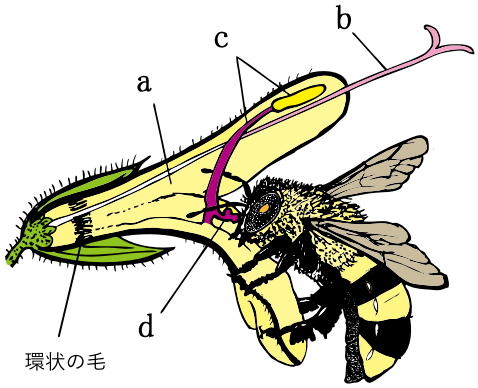
ヒメカンアオイ

※これらは、春先に地面近くで花が咲くという特殊なカンアオイ属の植物です。この花の種子には、アリが好むエライオソームという部分があり、自分の巣に持ち帰ることによってカンアオイ類の繁殖、拡散に寄与していると考えられています。エライオソームは、p.19 のコラム参照。

キバナアキギリ　（シソ科　花期/8～10月）

低山地の木陰に生える多年草です。紫色の根が細長に膨らんでいます。葉は矛型で茎、葉、葉柄には立った長い毛があります。秋、茎の先端に数段の黄色唇弁花をつけます。1つの花は黄色花被(a)が筒状になっていて、一本の長い雌しべ(b)と二本の雄しべ(c)、それにつらなった二個の退化した雄しべ(d)があります。他のアキギリ類との違いは、花筒の奥に環状の毛が生えている点です。

キバナアキギリ



キバナアキギリとマルハナバチ

コラム

～キバナアキギリの巧妙なしくみ～

トラマルハナバチ

この花が咲いたらよく見て欲しい。横から見ても前から見ても、何となくカバが口を開けているように見える。パックリと口を開いてハナバチの仲間の到来を待っているようにも見える。

この花はおもしろい仕組みで花粉を虫媒させる。蜜を吸いに来たマルハナバチが頭を花筒の中へ突っ込むと、退化した紫色の雄しべ(d)を押すことになる。するとテコのように繋がっている二本の雄しべ(c)がマルハナバチの背中へシーソーのように降りてきて、その花粉袋からハチの背中へ花粉をなすりつける。そして、ハチは他の花を求め、その雌しべに花粉をなすりつけ、他家受粉をさせる結果になる。キバナアキギリは、誠に巧妙な仕掛けを持つ植物なのだ。あなたもマルハナバチになったつもりで小さい木ぎれでそっと紫色の退化雄しべを押してみよう。二本の雄しべが上から降りてくるのが分かるはずだ。花壇に植えられる赤いサルビアも同じ原理としくみを持っている花だ。一度、ハチの訪れをじっくりと待って観察して見てはいかがだろう。

これらの草本類の上には、ウツギやハゼノキ、スギ等があります。それらにサネカズラが絡みついており、10 ～12 月にかけて独特の赤い実が多数ぶら下がります。

また、ここには元々、無想庵という茶室がありました。

無想庵について

久徴園の入口、杉木立と思斉寮（今の久徴会館）との間に無想庵という茅葺き屋根の趣ある茶室がありました。無想庵は、昭和 5 年（1930 年）、開校 10 周年の記念事業の一環として建てられました。4 坪ほどの茶室と小さな庭の周囲を竹垣で囲み、入口には無想庵と書かれた門がありました。平成 19 年、老朽化も進み、利用される機会も少なくなり、開校 80 周年の久徴園整備事業によって解体されましたが、かつてはここで、茶道の練習や茶会が開かれていました。久徴園 70 年の歴史をひっそりと見つめてきた茶室を懐かしく思い出される卒業生もさぞかし多いことでしょう。無想庵の前庭には、キミノセンリョウやクマザサが茂っていました。門の左右には、ハランとイズセンリョウが植わっていました。

当時の無想庵

無想庵の看板

サネカズラ　（マツブサ科　花期／8～9月　結実期／10～12月）

「実葛」と書きます。別名をビナンカズラ「美男葛」ともいいます。普段はただの常緑の葛ですが初冬のころ真っ赤な粒々の丸い果実ができます。この果実を鑑賞するためだけで庭に植える価値が十分にあります。あまり知られてはいませんが、和紙を作る時、コウゾやミツマタをほぐして晒した繊維だけでは漉くことはできません。タブの葉やサネカズラの茎をたたいて（昔は水車で叩いて）出てきた「ねり」という液を混ぜると繊維が均等に広がります。こうすると漉きやすく、また繊維同士をくっつける働きもします。和紙作りには不可欠なものです。サネカズラは万葉集では「さなかづら（核葛）」です。

サネカズラの実

核葛のちも逢はむと夢のみに析誓（うけ）ひわたりて年は経につつ　（「万葉集」巻 11-2479　柿本人麻呂）

ウツギ　（アジサイ科　花期/5～6月）

ウツギ

茎が中空で空ろなる木という意味で「空木」です。別名「卯の花」。卯の花というと「卯の花の匂う垣根に　ほととぎすはやもき鳴きて･･･」という「夏は来ぬ」の歌を思い出します。ホトトギスが南から渡ってきて、「テッペンカケタカ･･･」とか「東京特許許可局・・・」などと鳴き出す頃に卯の花が咲き始める初夏の様子を佐々木信綱は「夏は来ぬ」に歌ったものでしょう。ウツギと名のつくタニウツギ、ニシキウツギはスイカズラ科の合弁花植物ですが、ウツギはヒメウツギ、マルバウツギ(p.60 参照)、バイカウツギ、アジサイ類と同じアジサイ科の離弁花植物です。合弁花(ヒルガオのような花)か離弁花(ヤマザクラのような花)かは植物分類の基本的な特徴です。APGIII 分類体系では、この離弁花、合弁花の相違がなくなりました。ウツギの兄弟にサラサウツギという白くて外側が紅紫色、八重咲きのものがあります。ウツギは久徴園内のあちらこちらにあります。ここのウツギの木にはサネカズラが巻き付いています。

五月山卯の花月夜ほととぎす聞けども飽かずまた鳴かぬかも　（「万葉集」巻 10-1953 作者未詳）

オオイタビ（クワ科）

ホタルブクロ（キキョウ科）

キツネノカミソリ（ヒガンバナ科）

サラシナショウマ（キンポウゲ科）

キランソウ（シソ科）

キミノセンリョウ（センリョウ科）

久徴会館側を見渡すとフタバアオイ、ネズミモチ、クマザサ、イヌビワ、モチノキなどが植わっているのが見えます。中州にあたる場所には、ホウチャクソウ、アマドコロ、ダイセンミツバツツジなどなどがあります。

フタバアオイ　（ウマノスズクサ科　花期／3～5月）

元茶室「無想庵」のあった前辺りにフタバアオイが群生していましたが、いまはわずかに残っているだけです。カンアオイの仲間ですが、「双葉葵」の名のごとく、茎が這って伸び、先端にアオイに似た葉が2枚付くことによります。その間から淡紅紫色の小さい（径約1cm）花が下向きに咲きます。県下では、慨ケ岳（鹿足郡柿木村）に見られます。京都の賀茂神社の葵祭に用いられることから別名をカモアオイともいいます。徳川家の葵の紋の原型です。アオイの仲間のミヤコアオイ（p.65）も参照してみて下さい。

徳川家の家紋とフタバアオイ

コラム

フタバアオイ

～家紋～

家紋は、出自といって自分や自家の家系や血統を表すために用いられた日本独自の紋章である。平安末期に、公家の間で牛車の胴に独自の紋を付け都大路を練り歩いたのが始まりだとの説がある。鎌倉時代に入って武家に拡がり、源氏や平氏の家来達が軍旗に家紋を描いて交戦し、鎌倉中期に爆発的に普及した。後の天下分け目の戦いといわれる関ヶ原合戦では、少なくとも53種の家紋を付けた軍旗が乱立したという。江戸時代になると、一般庶民も家紋を使用するようになり、羽織や家具、墓石などに家紋を付けた。家紋は、植物の花などを図案化したものが多い。どの家にも家紋があり、家系や本家を辿れば自分の家紋が何かが分かるはずだ。

関ヶ原合戦図屏風の一部分

五大家紋と皇室のご紋（十六一重表菊）

ネズミモチ　（モクセイ科　花期/6月　結実期/11～2月）

ネズミモチ

本州中部以西の温暖な山地に生えています。果実がネズミの糞に似ており、木がモチノキに類することから「ネズミモチ」の名前がつきました。実際はモクセイの仲間です。関東以西で栽培されています。中国産のトウネズミモチという樹がありますが、ネズミモチより幾分、葉、花、果実が大きく、トウネズミモチの葉は先が尖っています。葉を空に向かって透かしてみると、葉脈が白く浮き出て見えます。トウネズミモチは女貞、果実を女貞子（じょていし）といい、神農本草経にいわく「中を補い、五臓を安じ、精神を養い、百病を除く。久しく服用せば、すこやかに肥え、身を軽くして老いず」とあり、生薬としても使われます。

クマザサ　（イネ科）

クマザサ

京都の鞍馬や大原には自生のものがあるといいますが大半は園芸種として植えたものです。冬になると葉の周囲に縁取りの白い隈ができることからこの名前がつきました。クマがいる辺りに生えているからだというのは正しくありません。クマザサの変種とされる山陰地方の山に多いチュウゴクザサは、よく似ていますが冬になってもあまり隈ができません。また、チュウゴクザサと似ているチマキザサは、チュウゴクザサと共にちまきを作る材料ですが、ササの桿鞘[a]に毛があるのがチュウゴクザサ、毛のないのがチマキザサとして区別されます。

小竹（ささ）の葉はみ山もさやにさやげどもわれは妹（いも）思ふ別れ来ぬれば（「万葉集」巻 2-133　柿本人麻呂）

a 桿鞘/ 節と節の間の部分を包むもので筍の皮の部分が該当する。

コバノズイナ（ズイナ科）

ユキノシタ（ユキノシタ科）

ミヤマヨメナ（キク科）

ミツマタ　（ジンチョウゲ科　花期／3～4月）

中国原産で江戸時代に渡来し、紙幣や証券などの和紙の原料として栽培されていますが、それが逃げ出して山林中に自生状になっていることがよくあります。枝が通常3つ又に分かれるので、「三又」、「三叉」または「三椏」といい、早春、葉の出る前に黄色の丸い頭状花序[a]を下垂します。ジンチョウゲと同じく花弁はなく、黄色部は萼の筒で、先端が4裂しています。万葉集では、ミツマタが「三枝」として詠まれているといい、すでにこの頃渡来していたとする説もあります。その歌は・・・

ミツマタ

春されば まづ三枝（さきくさ）の幸（さき）くあらば 後にも逢はむな 恋ひそわぎも（「万葉集」巻10-1895 柿本人麻呂歌集）

a　頭状花序／キクの花のように、花軸の先が円盤状に広がり、柄のない花が多数つく花序。

シライトソウ　（シュロソウ科　花期／5～6月）

春5～6月、15～40㎝の花茎を葉の中心から1本立てて細く白いブラシ状の花を咲かせて可憐です。この姿を白糸に例えて「白糸草」としました。花弁に当たる花被片[a]が細長くて上4本は長く（1㎝）、下2本は極短く、この花が軸の周囲を取り巻くようにたくさんつくのでブラシ状に見えるのです。下から上へと咲き上がります。冬は葉が地面に張りついたロゼット状で、近縁のショウジョウバカマやノギランとよく似ており、区別に困る種類です。

シライトソウ

a 花被片／花弁と萼片が同じ構造をもち区別ができなくなったもので、単子葉植物の花弁状のものを花被片という。

チャルメルソウ　（ユキノシタ科　花期／4～6月）

渓流沿いの湿り気のあるところに生えます。根生葉（こんせいよう）[a]の部分から花茎が伸びて小さな花を多数つけます。果実の形が、今は聞かれなくなった屋台のラーメン屋の楽器のチャルメラに似ていることからつけられた名前です。ルーペで拡大してみるとおもしろいです。

チャルメルソウの仲間は日本に10種くらいあり、分類も難しいのですが、島根県では山地ならコチャルメルソウ、低地なら、チャルメルソウが湿った山道で見られます。

a　根生葉／根の部分から茎を経ないで出る複数の葉のこと。

スギ　（ヒノキ科　花期/3～4月　結実期/10月）

東屋の近くに大きなスギの樹があります。万葉和歌の名札が貼ってあり、スギは万葉集でも「すぎ（杉）」です。　**古の人の植えけむ杉が枝に霞棚引く春は来ぬらし　（万葉集第十巻、1814番）**

スギの語源には諸説ありますが、スギはすくすく生えるという「直木（すぐき：まっすぐな木）」という説が有力です。天然記念物も多くあり、真っ直ぐに天に向かってそそり立つ気高いイメージや、生命力が強く長寿であることから神木や霊木として信仰の対象にもなっています。屋久島に生育する縄文杉は推定樹齢3000年とされ、世界的に長寿な樹木として知られています。（以前はその幹回りや地質関係から7200年とされたこともありました。）スギは古いタイプの植物であり、裸子植物の針葉樹で、昆虫が未進化であるか、まだ活発に活動しなかった時代に進化した植物であり、花粉の媒介は風に乗せて運ばれる風媒花です。雄花は枝の先につき、一斉に開花して大量の花粉を飛散させます。花粉アレルギーの原因となっており、花粉生産数の少ないスギの品種が開発されつつあります。また、建築、家具材として優れており、古くから杉の産地は、吉野杉・秋田杉・屋久杉など、産地名を冠して呼ばれています。

1982年、国立公園三瓶山で縄文時代の埋没林が発見されました。三瓶山の北にある三瓶小豆原埋没林は約4000年前の三瓶火山の噴火活動の火砕流によって埋没したものです。巨大な幹が直立状態で多数発見されたのですが、この埋没立木の大半が杉でした。地元の人は、地中に巨木があることは昔から知っており、「埋もれ杉」、「神代杉」などと呼んでいましたが、それが松井誠司氏らによって実際に発掘されたのです。

2000年4月には、出雲大社の本殿前を調査し、平安時代の本殿の巨大な柱（心柱）が発見されました。古代出雲大社の本殿は雲太という記述から48メートルもの高さだったと推定されています。三瓶山や佐田町の埋没林の発見によって、比較的近隣にスギの巨木林が存在したことが明らかになり、出雲大社の心柱も風土記に言う神門川を筏で運んだであろうと推測する人もあります。日本人とスギとの関わりは極めて深く、スギは、西欧の「石文化」に対して、「木の文化」といわれる日本の文化、建築を支えてきた有力な樹種といえます。ここの杉は樹齢何年でしょうか。平田先生時代からとすると優に100年以上は経っているということになります。

昭和50年（1975年）頃のスギと東屋

令和元年（2019年）のスギと東屋

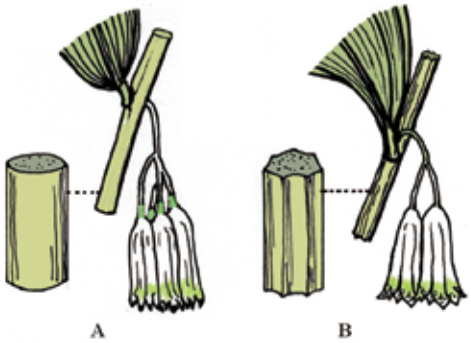
ホウチャクソウ/チゴユリ　（イヌサフラン科　花期/4～5月　結実期/9～10月）

ホウチャクソウは「宝鐸草」と書きます。花の姿が寺院や五重塔の軒先にぶら下がっている宝鐸（右図）に似ているので付けられました。春、何回か分枝した枝の先に3cmばかりの筒型の花を1～2個下垂させます。花筒はほとんど開きません。秋に直径1cmばかりの黒く熟した丸い実を付けます。

ホウチャクソウと近縁のチゴユリは「稚児百合」と書き、林床の下草の間で可愛らしく咲く百合の意味です。茎の先に白い小さな花を普通1個つけ、9月頃には黒い小さな実をつけて登山者の目を和ませます。

アマドコロ（キジカクシ科　花期/4～5月）/ナルコユリ（キジカクシ科　花期/5～6月）

アマドコロは、甘みがあり、地下茎がヤマノイモ科のトコロに似ていることからついた名前です。ナルコユリ「鳴子百合」は、垂れ下がる花を鳥追いの鳴子に見立てたものです。似ている両者ですが、アマドコロは、各節に1個または基部で2個に分かれた花が下がります。ナルコユリは、花の数が下の節ほど4～5個と多く、花と花柄との接点に緑色の小さな突起があります。花のない時には茎の中部以上で見分けます。アマドコロは茎に縦の筋があり角張っているのに対して、ナルコユリは断面が丸く、筋がありません。図はどちらか分かるでしょうか？（答えはp.75）



また、ナルコユリに似た「ミヤマナルコユリ」もあります。ミヤマナルコユリ（花期5～6月）は山地に生え、茎は細くほぼ丸い形、花柄が一旦茎から斜め上に葉脈に添って伸びてから1～3分枝して下垂し、花糸（雄しべの柄）に軟毛がある点で、ナルコユリやアマドコロと見分けることができます。

ヒュウガミズキ　（マンサク科　花期/3～4月　結実期/10～11月）

東屋の近くにあります。細い枝が株立ち状になって2～3mに伸びています。日向（宮崎県）の名前がついていますが、石川県～兵庫県の日本海側を分布域としています。この仲間に葯が暗赤色で7～10個の花からなるトサミズキ（3～4月、p.15）がありますが、ヒュウガミズキは葯が黄色のさらに小さな花をつけます。3月頃葉の出る前に、黄色い花が1～3個かたまって、2cm位の房となり下垂気味につけます。この仲間には、コウヤミズキもあります。

ヒュウガミズキ

東屋のこと

東屋周辺の草本を見てきました。お疲れでしょう。ここで一休みしましょう。耳を澄ますといろいろな音が聞こえてきます。シジュウカラ、エナガ、ヤマガラ、ウグイス、ホトトギス、コゲラなど沢山の小鳥たちがやって来ます。校歌にある「翠色濃き鷹の沢　久徴園に鳥鳴きて　松吹く風のさやかなる･･･」を彷彿とさせる場所です。東屋も創立百周年／令和２年（2020年）に、屋根の改修が行われました。久徴園には動物もいろいろと住んでいます。ここに池があった頃には、モリアオガエルが卵を産みましたし、カスミサンショウウオもいました。雪の日にはキツネの足跡が残っていたり、家族連れのタヌキはよく見かけます。多くの哺乳類や爬虫類がここで生活しています。最近では、アナグマやサルも姿を見せるという、久徴園はひとつの生態系を保っているものと思われます。では、そろそろ出発しましょう。

かつてはこんな光景も・・・昭和33年（1958年）頃

改修された東屋/ 令和2年（2020年）

アナグマ

イズセンリョウ　（サクラソウ科　花期／4～5月　結実期／10～12月）

元茶室と東屋の中間あたりの杉の樹の下にあります。暖地の山地に生える雌雄異株の常緑低木です。伊豆半島の伊豆山神社に多く生えているというので「伊豆千両」と名付けられたといいます。ただし、センリョウ（センリョウ科）とは分類上はまったく異なりヤブコウジ(p.83)の仲間です。その年に伸びた枝の葉腋に総状の花序を出し、果実は5㎜程度の乳白色のものが鈴なりにくっつきます。

イズセンリョウ

東屋の下にムラサキシキブ、コムラサキ、ヤブムラサキ、イズセンリョウがあり、東屋の上にはクマノミズキ、テツカエデの大木が見られます。東屋から久徴会館側には、シロダモ、シキミ（ハナノキ）、コウヨウザン、シュロ、などの樹木があります。

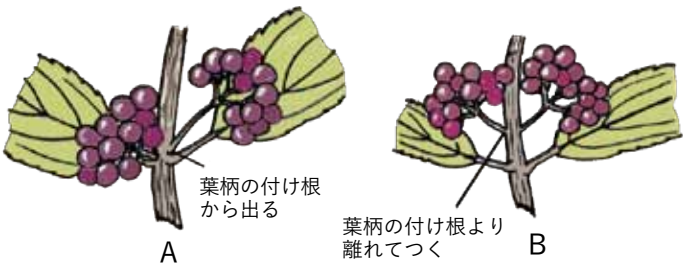
ムラサキシキブ　（シソ科　花期／6～8月　結実期／10～11月）

山地に普通に見られ、人の背丈ほどの落葉樹です。秋に3mmほどの紫の実が熟すことから「紫式部」の名前をつけたものでしょう。果実はもちろん奇麗ですが、初夏の花にも注目してください。淡い紫の花弁と黄色の雄しべの葯とのコントラストが見事です。個人的には、紫式部の重ねた着物がこの花のように奇麗だったことに由来するのではと思っています。近縁のコムラサキも実が美しいのでよく庭に植えられています。コムラサキとムラサキシキブ、山にみられるヤブムラサキとの区別点は次項に記述しています。

ムラサキシキブ

コムラサキ　（シソ科　花期／6～7月　結実期／10～11月）

初秋には小さな淡紫色花が鈴なりに咲きます。秋には紫色の実がなります。ムラサキシキブ類との区別点は花柄や果柄が葉の付け根につくか、少し離れてつくかで見分けることができます。右図ではA.Bどちらがコムラサキでしょうか。答えはp.77にあります。



ヤブムラサキ　（シソ科　花期／6～7月　結実期／10～11月）

ヤブムラサキ「藪紫」は、ムラサキシキブと同様山地に普通に見られ、花も果実も同じようですが、枝や葉、花柄や果柄にも柔らかい産毛のような毛が密生している点が違っています。この毛は、星状毛や羽状毛といわれるもので、葉を触ってみるとビロード布のようで、一種心地よい感触を覚えるものです。花や果実の数がムラサキシキブより少ない点も異なっています。久徴園には東屋の少し下、ムラサキシキブの近くにありますので比較してみてください。

ヤブムラサキ

答え　A.ナルコユリ（茎は丸い）　B.アマドコロ（茎に稜がある）

クマノミズキ　（ミズキ科　花期/6～7月　結実期/10～11月）

ミズキは「水木」で、春、枝を切ると水が滴り落ちることからついた名前です。クマノミズキはその近縁の仲間で、最初、三重県熊野で発見されたのに因んで「熊野水木」といいます。いずれも大木になり、区別がしにくい樹ですが、ミズキとの区別点は、① 葉が対生、② 花がミズキより一ヶ月くらい遅く、山陰では6月中下旬に咲く、という点です。果実は初め赤く、後に黒紫色になり、小鳥の好物で、種子は糞によって散布されます。

クマノミズキ

テツカエデ　（カエデ科　花期/6～7月　結実期/8～10月）

東屋の上、クマノミズキの左にある大木。樹も葉も全て大きなカエデの仲間。見上げないとよく分かりませんが、葉は大きくなると長さ15cm、幅20cmにもなるといいます。浅く5裂しています。秋の紅葉の頃、葉が落ちると観察しやすいです。樹皮は滑らかで灰色、白くて丸い模様があります。テツカエデ「鉄楓」とは、若葉に鉄さび色の毛があるからとか、材が黒いことに由来するからなどの説があります。鳥取県の大山などには、大木がたくさんあります。島根県東部にも確認されていて島根県の絶滅危惧種に指定されています。日本の固有種でもあります。

テツカエデの葉

ヌルデ　（ウルシ科　花期/8～9月　結実期/10～11月）

ヌルデは久徴園内にたくさんあります。ヌルデは、樹形、葉のつき方などハゼと間違える人が多くいます。葉の軸に翼があることでヌルデは見分けがつきます。秋の紅葉は赤くなり見事です。寺島良安の和漢三才図絵には「奴留天」とあり、天は手を意味し、これが和名になったとしています。この木を折ると白いにかわ状の液が出てくるので、物に塗るのに適しているというので「塗る手」から来ていると考えた方がいいようです。雌の木には小さな実が垂れ下がります。この実の表面に酸性リンゴ酸カルシウムがついていて塩辛い（但し、食べないこと）。そのためにシオノミ、シオカラノキあるいはシオギなどいう方言もあります。ヌルデノミミフシアブラムシという虫が産卵して葉にコブを作ります。これを蒸して乾燥したものを五倍子（ごばいし、フシ）といい江戸時代にお歯黒に塗ったといいます。ヌルデは、樹皮を傷つけ白い汁を塗料に使ったので「白膠木（ぬるで）」ともいいます。

ヌルデ

もみじして松にゆれそう白膠木（ぬるで）かな　（飯田蛇骨）

シロダモ　（クスノキ科　花期／10～11月　結実期／翌10～11月）

クスノキ科の高さ7～15mになる常緑の小高木～高木で、山野の湿潤な環境に生えています。葉の裏が白いのでシロダモ「白だも」といいます。ダモの由来は不明です。葉に3本の葉脈がよく目立ち、揉むと樟脳に似た香りがします。若葉には、白い綿毛がびっしりと生えていて「ウサギノミミ」とも呼ばれます。秋に葉の脇に黄緑色の小さい花が集まって咲き、翌年の秋に1.5㎝ほどの赤や黄色の実をつけ、雌株では花と実が同時に見られます。昔はこの種子からロウソクをつくり、公園樹や防風林としても植えられています。

シロダモ

シキミ　（マツブサ科　花期／3～4月　結実期／9月）

本来は、宮城県以南の暖帯に分布する常緑の小高木です。傷つけると独特の臭い（抹香）がしますが、有毒で特に果実は猛毒です。その「悪しき実」が訛ってシキミとなったとされています。この果実がスパイスに使われる八角とよく似ており、誤って料理に使われ中毒を起こす事故があります。この毒性と臭いが悪霊を寄せ付けないとの理由で「ハナノキ」と称してお墓や仏壇にお供えします。

あはれなるしきみの花の契かなほとけのためと種やまきけん　（藤原為家「夫木和歌抄」）

シキミ

コウヨウザン　（ヒノキ科　花期／4月　結実期／10～11月）

「広葉杉」と書いてコウヨウザンと読みます。スギに近い仲間です。中国、台湾原産で江戸時代に日本に入りました。高さ25m、直径80㎝にもなる常緑の高木です。葉は軸から左右に沢山つき、鎌状に曲がって細長くて先は鋭く尖り触ると痛い。枝や葉がよく落下する性質があるので、落ち葉を拾って確かめることもできます。成長が早く、樹形が円錐形で好まれ、お寺や神社に植えられました。久徴園では久徴会館に隣接して植えてあります。スギの近くにある大きな樹です。

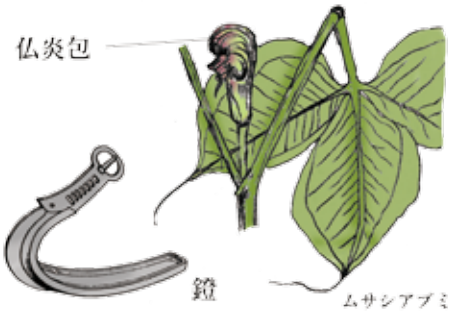
コウヨウザン

答え　A. ムラサキシキブ類　B. コムラサキ

大正2年(1913年)/創立10周年の頃の女子師範 - 久徴園高台から今市の街並を見る-
手前の屋根は寄宿舎と食堂。明治43年(1910年)に開通した鉄道や汽車の煙が見える。

ムサシアブミ　(サトイモ科　花期/3～5月　結実期/10月～)

東屋周辺に見られる大形の草本植物です。沿海部の山地に自生します。武蔵の国で作られた鐙(あぶみ)(馬具)は質が良いことで知られ、この花が鐙に似ていることから「武蔵鐙」と呼ばれました。鐙といっても西洋の鐙はDを横にした形ですが、日本の鐙は右図のようになっています。花を包む仏炎包という覆いがそういう形になっています。これを食べる人はいないと思いますが、テンナンショウの仲間なので恐らく毒を持っているのではないでしょうか。

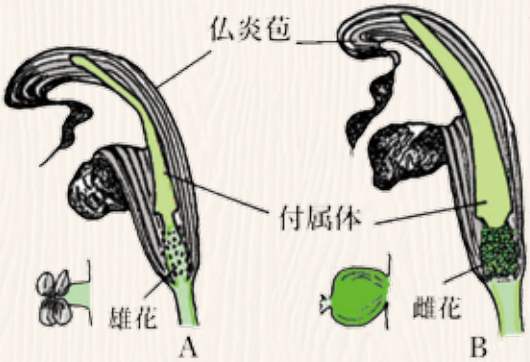


まむし草濁りて赭き瀬のほとり　(兼巻旦流子)

コラム

～テンナンショウ類の性転換～

ムサシアブミやテンナンショウの仲間は、性転換をすることで知られている。地下の芋がまだ小さくて栄養が不十分だと雄株となり雄花(A)が咲き、芋が大きくなって栄養が十分なうちは、雄株は雌株に転換し、雌花(B)をつける。雄花に侵入した昆虫は花粉をつけて仏炎苞の底部の開いている隙間から這い出ることができる。しかし、雌花には底部に隙間はなく、這い上がることもできないため、そこで死ぬか、底を食い破って外に出る。そのため、雌花には底部に穴があいていることがある。この仲間のマムシグサは秋に赤い実をつけ、有毒で食べられないが、生花などに使われる。



東屋横のアオキを目印にメインコースと重なります。山頂広場のイヌシデまでメインコースの植物を見ながら進んでみましょう。山頂広場の右手にネコノチチ、リョウブ、アワブキ、ソヨゴ、カゴノキ、ユズリハなどの樹木を見ることができます。

ネコノチチ　（クロウメモドキ科　花期／5～6月　結実期／10～11月）

山地に生え、表面が黄色を帯びた暗緑色の小葉は互生ではあるが、2つずつ同じ側に①①、②②と付く形になるのが特徴で、コクサギ型葉序といいます。夏に葉腋に短い柄を出しその先に小花が集まって咲きます。核果は未熟の時は黄色ですが熟すと黒くなります。ネコノチチとは変わった名前ですが、この果実の形がネコの乳首（チチ）に似ていることによってこの名前がつきました。

ネコノチチ

アワブキ　（アワブキ科　花期／6～7月）

小枝が褐色であることからすぐ分かります。葉の裏の毛も褐色です。葉は長さ10～25cmと大きく、ほぼ平行に葉脈が並びます。夏には小枝が小さく枝分かれし、泡のような小さな白い花が密につきます。しかしアワブキはそこからついた名前ではなく、枝を切って燃やすと切り口から盛んに泡が出ることによります。つまり「泡吹」です。アワブキは昆虫の大好きな樹で、葉が穴だらけになったり、虫こぶがたくさんできます。

アワブキ

リョウブ　（リョウブ科　花期／7～9月）

近辺の山や林にはどこに行っても出会うことができるほんの数mの落葉低木です。葉が輪状についているのが特徴で、6～8月、長期にわたって15㎝くらいの房状の白い花が咲きます。若葉は食用にするといいますが熱を加えるとすぐに黒ずんでしまいます。昔からリョウブめし（令法飯）がつくられています。樹皮がまだら模様に剥げ、サルスベリやナツツバキの樹皮によく似ていますが、中には剥げ落ちないで残る樹もあります。

味噌なめて昼餉すましぬ令法飯　（句堂）

リョウブ

ソヨゴ　（モチノキ科　花期／6～7月　結実期／10～11月）

7m以下の常緑低木で葉に鋸歯はありません。縁はわずかに波打ち堅く、風が吹くとそよぐので「ソヨゴ」だといわれています。秋に直径8㎜ほどの赤い実が葉間から垂れ下がってよく目立ちます。地方によってはこの樹をサカキの代用とするところがあります。葉を熱すると膨れて気泡ができ、破裂して音がするので「フクラシバ」という別名があります。

凍てつきし冬青（そよご）に赤き実の光（読み人知らず）

ソヨゴ

カゴノキ　（クスノキ科　花期／8～9月　結実期／翌年秋）

高さ20m、直径50㎝にもなるクスノキ科の常緑高木で、樹皮がはげ落ち鹿子（かのこ）模様になるので「鹿子の木（カゴノキ）」と名付けられています。リョウブ、ナツツバキ、サルスベリ（全て落葉樹）なども同じような樹皮模様になりますが、山地で常緑のこのような樹皮の樹は少ないので、すぐ見分けが付きます。立久恵峡の不老橋を渡った左岸に沢山生えています。久徴園では山頂広場を上がった右手にあります。

カゴノキの樹皮

ここで見られる樹木
コナラ／イヌシデ／スダジイ／カクレミノ／ヒサカキ／タブノキ／ユズリハ
カラスザンショウ／ヤマモミジ／クロガネモチ　など

昭和40年代に、柳楽 茂氏が肥後椿を主に栽植し、椿園ができました。今もツバキの樹がトンネルをつくり、花をつけています。では、椿並木へ入りましょう。

椿園の右側樹林中には、サクラ類、クロガネモチ、ヤマモミジ、カラスザンショウ、アカメガシワ、クスノキ、カクレミノ、モチノキ等があり、出雲科学館側には、トチノキ、クスノキ、ハゼノキ、ヤマザクラ、ソメイヨシノ等が見られます。

肥後椿のトンネル

肥後椿　（ツバキ科）

久徴園山頂広場の南側にある肥後椿は、柳楽 茂氏が昭和40年代に植栽されたものです。当初は1m前後の苗でしたが、今は、こんなに成長し、毎年立派な花を咲かせ続けています。肥後椿は、肥後藩（熊本県）の武士や豪農で組織された「椿連」によって品種改良が行われ、「一重平咲き梅芯」といって、花弁（花びら）は一重で平開、花弁数5～10枚、雄芯（雄しべ）数100～250本、その数・長短・色・太さ等で、品種を見分けます。雄しべが梅花状や輪生状なのが最大の特徴です。

トチノキ　（ムクロジ科　花期／5～6月　結実期／9月）

山地の渓流沿いで高さ20～30m、直径2mにもなる落葉高木です。1枚の葉に5～9枚の小葉を持つ手のひら状で最大20㎝にもなる大形の葉です。ホオノキの葉に似ていますが、トチノキには鋸歯があるので区別できます。5～6月頃、枝先に15～25㎝の白色花序を直立させ、9月に実が熟して中から黒い種子を出して落下します。この種子をあく抜きしてとち餅を作ります。材は木目が美しく弦楽器の板などに利用されます。セイヨウトチノキはマロニエといい葉の鋸歯が荒く果実に刺があります。

トチノキの実

椿園を過ぎるとグラウンドの上に出ます。ここには、大きなスダジイがあります。ここからグラウンドを左に見下ろしながら、丸太の階段を下ります。斜面には、クララ、イスノキ、コナラ、ヤブニッケイ、タブノキ、ヒサカキ等が生えています。さらに、足下には、ヤブコウジが生え、秋から冬に葉の陰から赤い実が顔をのぞかせています。鎖で保護された丸太の階段を下りきると、グラウンドや体育館が見える場所に突き当たります。

クロガネモチ　（モチノキ科　花期／5～6月　結実期／11～4月）

関東以西の暖地の山地に生える高さ10mになる雌雄異株の常緑高木です。樹皮から鳥餅（黐）が取れ葉柄や若枝が黒紫色を帯びているために「黒鉄黐」の名前がついたという説。また、これらが乾くと黒くなることからついたという説があります。冬の雌株にできる沢山の赤い実は、緑葉と対比して綺麗です。松江市城山公園のクロガネモチは有名ですし、公園や街路樹、庭木としてもよく植えられています。

クロガネモチ

スダジイ　（ブナ科　花期／5～6月　結実期／9～10月）

大きくなると高さ20～25m、幹の直径1.5mにもなります。自然林では純林となって、こんもりと茂り鬱蒼としたスダジイ林をつくります。暖温帯の極相林（植物群落の移り遷わりの最終段階の林）の一形態となります。お寺やお宮の境内では樹の伐採が制限されるので、スダジイやタブノキのような照葉樹が深い森を作って残っています。社寺林といいます。古代の平地は、シイやカシ類からなる照葉樹林が茂っていました。

スダジイ

ヤブニッケイ　（クスノキ科　花期／6月　結実期／10～11月）

山地のシイ林やタブ林に普通に混生し、あまり高くならない常緑樹です。葉には3本の葉脈が顕著で、揉むと肉桂の臭いがし「藪肉桂（ヤブニッケイ）」と呼ばれます。秋に長さ1.5㎝ほどの黒紫色で楕円形の果実を実らせます。ニッケイ「肉桂」は徳之島や沖縄に生える常緑高木で根や樹皮から健胃剤を取り、最古のスパイス、スパイスの王様などと呼ばれる香料シナモンの原料の一つになります。ニッケイは、3-4号館中庭に植えられています。

ヤブニッケイ

「出雲高校平田植物園」（昭和37年・42年・52年）

初期の「花暦」（昭和51年～）

「出雲高校平田植物園」は、昭和31年から昭和52年まで発行され、「花暦」は改訂6版まで発行されました。また、80周年を記念して作られた花暦改め「平田植物園めぐり」は、改訂4版まで増刷を繰り返して発行されました。平成31年春には、ガイドブックが加わり平田植物園の歴史を今に伝えています。

「花暦」（昭和53年・57年）

「花暦」（昭和61年・平成4年・6年）

「平田植物園めぐり」（平成12年～・20年～29年）

イスノキ　（マンサク科　花期／4～5月　結実期／9月）

イスノキの名前の由来は不明ですが、別名を「ヒョンノキ」といい、イスノキはアブラムシ類の寄生を受け、虫こぶを作りやすい樹です。葉にできる粒状の虫こぶはヤノイスアブラムシ、実に寄生するイスオオムネアブラムシはハート型、マンゼンアブラムシやイスノフシアブラムシが寄生するとイチヂク状の虫こぶとなります。アブラムシは虫こぶから這い出すと出口に穴が空き、中が空洞となります。子供たちはこの実を吹くとヒョウと鳴るのでこの樹を「ヒョンノキ」といいました。久徴園のイスノキにも沢山の虫こぶができています。

イスノキ

ヤブコウジ　（サクラソウ科　花期／7～8月　結実期／10～11月）

山野の林の下、登山道脇などに生える10㎝以下の常緑の小低木です。葉は茎の上部に3～4枚輪生状に付けます。夏には、葉の下に小さな白い花（7㎜前後）を付け、秋に小さな赤い実（5～6㎜）を1～3個隠れるようにぶら下げます。盆栽や庭の根締めとしても植えられます。万葉集では「やまたちばな」。万両、千両に対して「十両」とも呼ばれ縁起を担ぎます。因みに、「百両」はカラタチバナ、「一両」はアリドオシのことです。

この雪の消（け）残る時にいざ行かな山橘の実の照るも見む

（「万葉集」巻19-4226　大伴家持）

ヤブコウジ

タラヨウ　（モチノキ科　花期/5月　結実期/11～5月）

タラヨウの葉裏をなぞった文字

成長すると高さ10m、樹径60cmにもなる大木になります。葉も大きくて硬く、10～18cmになり、表面はツヤがあり、裏面は淡黄緑色で、硬いものでなぞるとその部分が酵素の働きで黒くなり、字が書けます。古くは、この葉にお経を書いたといわれ、寺院などに植えられているというわけです。タラヨウは「多羅葉」と書きますが、同じくインドで葉裏にお経を書いたといわれる多羅樹になぞらえた名前なのでしょう。庭木にもします。赤い果実が秋から翌年に掛けて成熟します。

久徴会館の上斜面は、道が狭く急になっているので注意して歩いて下さい。久徴会館の周りには、ウラジロガシ、モミ、スダジイ、タブノキが生えています。ここを通過すると、元来た道へ戻ります。ここで、久徴会館サブコースは終わりです。東屋周辺や久徴園入口の植物を見ながら、久徴園を後にしてください。

応援歌の練習風景（昭和20年代）

久徴園から見たグラウンド、体育館側の風景/昭和29年（1954年）頃

グラウンドの桜/令和2年（2020年）

現在、弓道場がある高台付近から撮影か。（1972年に完成するグラウンド拡張工事前の写真。）

随想　「久徴園に鳥啼きて」

PTA 会長　　山﨑 育男

私は約 30 年前、本校に在籍していました。学生時代は「久徴園」はあまり身近なものではなく、むしろ校内にいた「オオサンショウウオ」はよく覚えています。

しかしながら、校歌を聞いたり見たりする機会がある時などに「久徴園に鳥啼きて」という歌詞で思い出していました。でもよく考えると、校歌の歌詞になっているというのは凄い事で、学校の象徴ではないかと思ったのです。

そして今さらながら「久徴園」を思い出してみると、30 年前は思斉寮と無想庵（茶室）が健在で、女子は茶室で作法を学び、友人達と山頂広場に行った記憶もありました。ですが、そこに植えられている木々や花々の事は申し訳ないですが、あまり覚えていません。当時は植物へ関心を持つ余裕がなかったと思います。

だから先日、満を持して「久徴園」に足を運びました。現在は綺麗に整備され、植物園めぐりのコースが 4 つ設けられています。そのメインコースには「久徴園入口」の案内板があり、その少し奥の校舎との間に令和の由来でもある梅の木が、万葉集の短歌とともに慎ましくありました。案内板から山頂広場までのコースを辿っていくと、植物達にたくさんの名札や説明文などが随所にあり、整備された歩道に使われている木製ブロックは久徴園で枯死した松が再利用されていて、感心しました。頂上広場に着き、展望デッキに立ってみると、金木犀の木が下のほうにあり、その香りと鳥の囀りで懐かしいけれど、とても新鮮な気持ちになりました。ふと癒された貴重な体験でした。

だからこそ、今の学生さん達が勉強などの合間に「久徴園」を散歩してリラックスできるような時間も大切だと思います。

私達卒業生もぜひ足を運んで、当時を思い出して散策しながら今の「久徴園に鳥啼きて」を感じてみて欲しいと思います。

竹田　茂・画